

美意識を育むためのタキソノミーテーブルの開発実践

— メタ認知領域に焦点を当てて —

吉川 和生 中島 敦夫 松本 裕子 内田 雅三
中村 和世

1. 問題の所在

学習指導要領¹⁾では、「形・色・イメージ等」をキーワードとした共通事項が新たに示され、図画工作・美術科の中で子どもたちにつけたい資質や能力が明確化された。今、図画工作・美術科という教科の中でまたは、題材を通してその学年もしくは義務教育9年間の中で子どもたちにどのような力を付けていくのかが問われている。つけたい力を明確化して授業の目標・課題を設定していくことは、授業改善及び教科の目標を達成していくことにもつながっていく。このことは、図画工作・美術科の学校教育における重要性を再認識していく意味でも欠かせないことである。

2. 研究の概要

(1) 目指す子ども像

美的体験を重ねる中で、自分が美しいと感じる価値を大切にできる態度を身につけ、さらに他者の価値観を理解しようとし、自他を含めた美意識を高めようとする子ども。

(2) 研究の趣旨

3H美術教育²⁾で提唱されている生きる力に向かう美術教育を実現することを目標にして、私たちは、「美意識」を子どもたちに育む取り組みを模索してきた。美意識を育むことは、子どもたちが自分なりの感性を働かせて学習をすすめていくために有効に働くと考える。昨年度は、「創造的思考力を生かした保育・教科の授業—美意識をはぐくむためのタキソノミーテーブルの開発実践—」と題して、ポートフォリオ評価法の開発・実施やタキソノミーテーブル³⁾を基にした評価の指標の作成を行うことができた。昨年度の研究の課題としてメタ認知領域においては児童に変化が見られないという課題が浮かび上がってきた。そこで、今年

度はタキソノミーの検証も行いながら、題材を実践するとともにメタ認知能力を育むための方策を探っていきたいと考える。

(3) 本研究における美意識の定義

美しさやよさに関する価値の意識や感情

「美意識」は、「美に関する意識。美に対する感覚・知識⁴⁾」と辞書的には説明されている。また、『美学辞典』によると心理学的立場では美的態度における意識過程を指し、哲学的観点では美的価値に関する直接的体験を意味する。

美意識には活動様式から見て美的享受あるいは美的観照と芸術創作の2面がある。この両者の間には緊密な関係の存することが認められ、本質部分では統一的に把握されている。⁵⁾ 私たちも美意識は、授業における創作活動及び鑑賞の活動両方で働くものであると考えている。子どもたちは、鑑賞活動(美的享受・美的観照)において自分なりの視点を持って作品をみたり、創作活動の中で自分なりのこだわりをもって作ったりしている。これらを踏まえて私たちは美意識を、鑑賞活動・創作活動を含めた造形的な活動の中で働く「美しさやよさに関する価値の意識や感情」と定義している。

しかしながら、何をもって「美」と感じるかは個によって違う主観的なものである。同じ現象であっても受け止める側によってそれが美であることも、そうでないこともある。つまり、美意識とは個々によって異なる「美的な価値観」と言い換えることができるであろう。この極めて個人的な価値観に、美術教育を通してよりよい生き方を追究するという視点を加えれば、個人的・主観的な価値と同時に、自分を取り巻く他者や文化とかかわっていこうとすることに価値を見出す意識を育てていく必要がある。なぜなら、文化を継承

Kazuo Kikkawa, Atsuo Nakashima, Yuko Matsumoto, Masazou Uchida, Kazuyo Nakamura: Developing and practicing of Taxonomy table to cultivate elementary and junior high school children's aesthetic feelings : focusing on Meta-cognitive domain

し発展させていく大きなうねりを生み出すためには、個々の美意識が他者の美意識や社会との関係の中で伝統を理解すると同時に成長・成熟が重要であると考えられるからである。それゆえに、本研究では「美意識の育成」を根底に据えている。

(4) 美意識が育まれる過程

竹内によると美意識を構成する心的要素として感覚・表象・連合・想像・思考・意思・感情などが挙げられ、これらの要素の複合体に過ぎないとされている。⁶⁾これらの要素は、「感性」「知性」「技能」につながるものである。

本部会では、「感性」と「知性」そして「技能」が相関的にかかわることによって「美意識」が育まれるという仮説を立てている。(図1参照)尚、ここでの「感性」「知性」「技能」は後述のタキソノミーにおける「情意領域」「認知領域」「精神運動領域」にそれぞれ対応している。

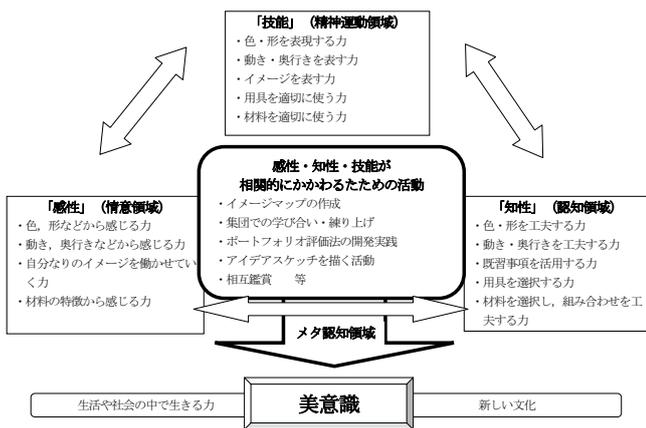


図1 美意識が育まれる過程

(5) つけたい力

ア. 自分なりに材料や色や形の組み合わせなどを工夫することができる力 (認知領域)

与えられた材料や色や形の組み合わせなどを意図や目的に応じて、自分なりに工夫して表現することのできる力である。材料や色・形を工夫して表すためには、個人の中にある既習事項としての今までの制作活動や材料体験を思い起こすことが不可欠である。さらに鑑賞と関連して活動を行うことで力をより一層伸ばすことができる。また、自分なりに工夫したことが認められることで、「つくりだす喜び」を味わうことができるようになる。

イ. 自分のイメージにあわせて絵や立体、言葉などに表すことのできる力 (精神運動領域)

自分のイメージにあわせて、用具や材料を適切に用

いて、色や形を組み合わせることで表現することのできる力である。自分のイメージを表現するためには、技能が必要である。学年に合った技能を持っていることで表現活動にも幅ができ、意欲的に取り組むことができる。そのためには、前述であったような今までの学年での積み上げが欠かせない。また、鑑賞などにおいての自分の思いや感じたことを言葉や文章にして表すといった行為も技能としてとらえていく。

ウ. 表したいことを見つけ、自分なりのイメージを広げ、深めていく力 (情意領域)

対象から「自分もやってみたい」と意欲を感じ、そこから自分なりのイメージを広げ、深めて創作意欲を抱く力のことである。これらは、自分にとっての心地よいもの・美しいものを探そうとする姿勢から生まれてくるものであり、子ども達の心を動かされる様な出会いや体験を生活や学習の中で常に意識しておかなければいけない。このような体験や出会いを重ねることによって対象から表現に対する意欲や興味関心を育むことができる。

エ. 他者と関わりながらコミュニケーションをとり、自分らしさや改善点の認識に基づいて、自分なりの美意識を形成したり深めたりしていく力 (メタ認知)

制作や批評・観賞を通して、自分らしい表現の仕方や見方・感じ方、つまり自分の美意識とはどういうものなのかを理解し、それをさらに広げたり、深めたりしていく自己知識や自己調整の力のことである。自分らしさを認識するためには比較としての他者が必要であり、コミュニケーションをとりながら活動する中で認識は深まっていく。とりわけ美的な現象という「心に響くもの」を介して行う他者とのコミュニケーションの過程は、価値観・美意識の形成と深化に深く関わっている。

(6) 研究の目的

小中一貫9年間での図画工作科・美術科におけるタキソノミーテーブルの開発・実践を行うとともにメタ認知能力を高めるための具体的な実践を行い、子どもたちに生涯を通じて創造的に生きるために必要な美意識を育むための授業開発を行う。

(7) 研究の方法

① タキソノミーテーブルの実践開発

タキソノミーとは、ブルームの提唱した評価の考え方で、現行学習指導要領の観点別評価4観点はこのタキソノミーを応用して設定されている。タキソノミーでは教育目標が以下の3つの領域に整理されている。

○認知領域：知識の記憶や活用からなる

○精神運動領域：運動技能や操作技能からなる

○情意領域：興味、態度、価値観からなる

これらの3領域を簡潔に要約すれば、認知は知識・理解、情意は感情・情緒、精神運動は技能・技術に関する領域と見なすことができる。

近年、クラスウォールらによって、ブルームが前世紀後半に提唱したタキソノミーを継承・発展させた「新タキソノミー」が提唱されている。本研究ではこの新タキソノミーを美術教育の評価に応用するべく、認知領域・情意領域・精神運動領域の3領域に加え、価値の形成の側面として「メタ認知」を取り入れた目標群の試案を作成した(表1参照)。今年度は、メタ認知領域に焦点を当てて実践を行うことにより他の領域にどのような効果をもたらすかも含めて検証をしていき、改善を図っていく。

② ポートフォリオ評価法の活用

ア. 見通しを持って活動をするために

これまでの学習で習得した技法や技術を確認し、次の題材に活用したり、これまでにつくった作品から次の作品を発想したりする手助けとして活用する。また、これまでに蓄積したものから学習のプロセスを学び、新しい題材でもこれらを生かして見通しを持って学習を進めていけると考える。

イ. 自己を振り返るために

児童・生徒が自己の造形活動を振り返るための振り返りシートを工夫する。これを主題設定から発想・構想・造形活動・鑑賞活動のどの段階でも行う。これを言語で残していく。前の言語活動と次の言語活動がつながることによってメタ認知の能力が高まると考える。

ウ. 自己評価を進めるために

定期的にポートフォリオを振り返り、子ども自身が自己の傾向や得手・不得手を知る手がかりにしたり、学習の達成度を測ったりする資料として活用する。また、達成のために修正したり、調整したりするための手がかりになると考える。

(8) 検証の方法

本研究の、目的に照らして効果的な授業開発ができていたかという視点から以下の方法で検証を行う。

① アンケートの実施

認知・精神運動・情意・メタ認知の4つ領域に合わせた設問を作り、アンケートを取る。昨年度の結果と比較をして研究の成果と課題を探る。

② 研究授業の実施及びタキソノミーテーブルの妥当性の検討

各題材に関して、タキソノミーテーブルを作り、研究授業などを行なって実践する。事後に振り返りをし、

表1 図画工作・美術科のタキソノミーテーブル⁷⁾

	知識の次元	認知プロセス次元		
		1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
認知領域	事実的知識 (美術用語、造形の要素と原理)	これまでの記憶から、美術用語や造形の要素と原理を想起して、新しい学習内容に関連づけている。	制作や批評・鑑賞の活動において、状況に適した美術用語を用いたり、造形の要素と原理を活用したりしている。	制作や批評・鑑賞の活動を通して、美術用語や造形の要素と原理に関する新しい認識を獲得している。
	概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	題材のテーマのコンセプトを認識・理解している。	制作や批評・鑑賞の活動において、題材のテーマのコンセプトを同定し関連性を判断している。	題材のテーマのコンセプトをベースにしながら、制作や批評・鑑賞の活動において、自分自身のコンセプトを深めている。
精神運動領域	手続的知識 (表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解・習得する。批評・鑑賞の方法を理解・習得する。		習得した技法・技術を自らの制作に応用している。
情意領域	感情の次元	情意プロセス次元		
	興味・関心・態度	1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	習得した批評・鑑賞の方法を自らの批評・鑑賞に応用している。
	美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	美的な現象や存在を受け入れようとしたり、それらに対して注意を向けたりしている。	美的な現象や存在に見出される価値を認め、その価値を自分の持っている価値の意識や感情との関連で吟味している。	制作や批評・鑑賞の活動を通して、よさや美しさに対する価値の意識や感情を再構成している。
メタ認知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	自分らしさや改善点の認識に基づいて、自分なりの美意識を形成したり深めたりしながら、制作や批評・鑑賞の活動に取り組んでいる。
	自己知識 自己調整	ポートフォリオ等からこれまでの学習を思い出している。	制作や批評・鑑賞において自分らしさが表れている点を分析している。	制作や批評・鑑賞において改善すべき点を見出している。

タキソノミーテーブルのよりよい活用法について検討を行う。そこから次年度以降の実践につながるようにする。

③ 子どもの作品分析

ポートフォリオや作品分析をもとにして子どもたちの学習の様子を振り返り、分析を行う。そこから題材開発や授業作りの中でどのような手立てが有効であるか、また今後、どのような改善ができるのかを探っていく。

3. 研究の実際

3.1 実践事例1

(1) 題材について (小学校1年生)

○題材名 「光のオブジェ～照らせ夢色のともしび～」

○学 年 小学校1年生 32名

○実施期間 平成24年10月～11月

○題材の概要

本題材は、光や影の味わいを生かした焼き物を作る学習である。光を生かした表し方に興味を持ち、その効果を確認しながら発想し、光の特長をいかしながらつくることをねらいとしている。穴をあける位置や大きさ、数または形によって味わいが異なってくることに試行錯誤しながら気づくことができる。

導入ではこれまでの経験を振り返り、イメージを膨らませる。制作過程では粘土の特性を生かし何度も確かめながら行ったり、交流しながら深めたりしていく。完成した作品を100年(とわ)の庭に展示したり、幼稚園さんに披露したりするなど場や相手を意識した作品作りを行っていく。

○題材の目標

- ・初めて経験する材料に関心を持ち、自分の発想を広げて楽しんで表現できるようにする。
- ・材料の特徴をとらえ、光と影の効果を十分に考えながら、発想することができるようにする。
- ・表したいことと、時や場所の様子を考え合わせながら、調和や視覚的な効果を考えて造形的な構成を工夫していくことができるようにする。
- ・友だちの感じ方や表し方に関心を持ち、改善に生かしたり、よさを伝えたりする活動を通してより深く見ることができるようになる。

○学習計画 (全5時間)

- 第1次 光と影について知ろう……………1時間
- 第2次 光の出し方を考えながら工夫して成形をしよう……………2時間
- 第3次 絵付け・釉薬を塗ろう……………1時間
- 第4次 100年(とわ)の庭に置いたり、幼稚園さんに披露したりしよう……………1時間

○本題材のタキソノミーテーブル

メタ認知の次元	認知プロセス次元		
	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
自己知識	主題に照らして自己の活動を振り返る。「あなのかずがすくなくてひかりがあまりで出なかったな。」「ぼくはいたづくりがとくいだ。」	あける穴の「形」「大きさ」「数」の観点から自分の作品のよさを見つける。	よさを伝えたりする活動を通して、作品に表された自分らしい思いに気づき、自分の思いを深める。
自己調整			

(2) 学習の実際

ここがいーね・見て見てコーナー

「ここがいーね・見て見て」コーナは基本的には制作途中に自由に書いて掲示できるようにしているのだが、今回は陶芸用粘土を使うので途中で活用することはせず、作品が出来上がってから活用した。今回の題材では、造形要素として、あける穴の「形」「大きさ」「数」に絞って書かせていった。

子どもたちが自己の作品を振り返って言語化したり、友だちのよいところを見つけて言語化したりすることができるようにできるだけ机間指導の中でよさを見つけ適切な言葉で表現することに努めた。また、子どもたちの持つ作品に対する思いを引き出し意識化するために対話を活用した。対話をする中で思いを引き出し教師が言葉を置き換えていくことで言語化へのきっかけを持たせるように意識して指導を行った。いきなり書いたり話したりするのが苦手な児童もじっくりと対話を行うことで自分の思いに気づいたり、それを言葉にしていくことができていった。

ポートフォリオの蓄積

子どもたちは活動を通して、様々な材料や技法とであったり、ひらめきや発見、失敗を経験したりして、作品に対するたくさんの思いを心の中にためていく。そのことが作品説明や交流などでの大切な情報となる。そこで、その情報を言葉として残していくためにポートフォリオを活用した。1年生という発達段階なので簡単なものではあるが、みんなで部屋を暗くして光のオブジェを見たときの感想や前述のイメージマップ、発想や構想などをためていった。それら情報は友だち同士で交流し作品を見るだけではわからない発想段階や構想段階を見ることができた。また、自己の制作を進めていく際にも振り返り、そのときの感情を思い出すもの、あるいは情報を取り出せるものとして活用していく児童もいた。

しかし、低学年では、制作に夢中になりあまり振り返ることができない児童も多くいた。

(3) 成果と課題

メタ認知に焦点を当てた研究を進めたことで自己の作品を振り返ったり、その時の思いを振り返ったりして作品への思い入れを深めたり、図工の中の何が好きで何が苦手という自己についての初歩的な知識を持つことができた。しかし、そのことを次の作品作りの発想や構想などに生かしていこうとする姿勢にまでは至っていない。どの発達段階でメタ認知領域が発達していくのか、どのタイミングでどのような手立てをすればよいのかについてはこれから研究を進めていかなければならない。

3.2 実践事例2

(1) 題材について (中学校1年生)

- 題材名 「動きを見つめて」
- 学 年 中学校1年生 41名
- 実施時期 平成24年9月～平成24年11月
- 題材の概要

本題材は、部活動等に取り組む自分の一瞬の動きをとらえ、水彩画で表現することを通し、主題を生み出し創意工夫して表現するための基礎的な技能を身に付けさせるとともに、生活を豊かにする創造活動の価値を考えさせるものである。日々の生活の中から輝いている自分の姿をもとに主題を決め、よりよく表現できるよう、ポーズや構図・水彩絵の具の使い方等を工夫することにより、絵画表現の基礎的な技能を身に付けさせる。また振り返りや相互鑑賞により、その印象を強く心に留めたり、心が満たされたりする経験をさせることをねらいとしている。

本学級の生徒は、本題材の前に取り組んだポスターのアイデアを出す段階では約8割が、イメージマップを活用するなどし、自分らしい発想をしようとした。しかし、イラストの構想段階で、資料等を活用して工夫しようとする生徒は1割程度であった。また、美術アンケート(7月実施)「自分の作品のよさや工夫点を言える」の肯定的回答が57.5%である等、自分の作品に自信が持てない実態があり、完成度の向上や鑑賞による相互評価が必要であると考えた。

指導に当たっては、人物クロッキーを体験させた後、部活動等における自分たちの一瞬の動きをとらえて表現したいテーマを決め、アイデアスケッチをさせた。下絵づくりや彩色では、主題を最も表現できる構図や表現内容を工夫できるよう、写真等を参考に人物の動きや色を確認したり、伝えたい内容が表現できているのか主題を振り返って確認したりした。また、制作途中や完成作品のよさを交流しあえるよう、アイデアスケッチや制作途中の写真などを添付した振り返り

ポスターを作成し、ポスターセッションにより、お互いの工夫点や表現のよさに気づけるようにした。

○題材の目標

- ・自分の生活を表現することに関心を持ち、主体的に心豊かな表現の構想を練ったり材料や用具の特性を生かしたりしようとするようにする。
- ・自他の作品に関心を持ち、主体的にみ方や理解を深めるようにする。
- ・感性や想像力を働かせて、主題を生み出し、一瞬の動きをとらえて、単純化や省略、強調を考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練るようにする。
- ・感性や造形感覚などを働かせて、材料・用具の特性を生かし、自分の表現意図に合う方法を工夫したり、彩色の順序を考えたりするなど、見通しを持って創造的に表現するようにする。
- ・感性や想像力を働かせて、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り味わうようにする。

○学習計画 (全13時間)

- 第1次 クロッキー (2時間)
- 第2次 テーマ設定・アイデアスケッチ (1時間)
- 第3次 鑑賞 (1時間)
- 第4次 下絵づくり (1時間)
- 第5次 彩色計画・彩色 (5時間)
- 第6次 振り返りポスター作りと鑑賞 (3時間)

○本題材のタキソノミーテーブル (メタ認知領域)

メタ認知の次元	認知プロセス次元		
	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
自己知識	ポスターカラーと水彩絵の具の共通点や相違点をポートフォリオをもとに確認しようとする。「絵の具の溶き方や、水の量は全然違うんだな。」等	アイデアスケッチや完成作品の鑑賞で、振り返りポスターに工夫点を書いている。「この段階で、人物の色をもとに、背景の色を選択して彩色できた。」等	振り返りポスターを用いた鑑賞により、形や色から感じるイメージと作者の意図を確認したり、制作過程における変化を楽しんだりして、見る視点を広げようとする。
自己調整		制作過程や完成作品の鑑賞において、改善点を見出している。「人物の肌の色を混色で工夫しよう。」等	

(2) 学習の実際

一瞬の姿を切り取ってポーズを決め、作品作りへ

部活動や運動会・宿泊行事等で一生懸命活動している自分の一瞬の動きを切り取って生き生きと表現できるよう、事前に準備した写真や友達同士で実際にポーズをとった写真をもとにスケッチした。また、主題を検討して文書にまとめ、下絵を作成していった。ほとんどの生徒が中学生になり、目標を持って取り組んでいる部活動や楽しく頑張った行事での自分の姿を積極的に描こうとしていた。

振り返りポスターを作成し、相互評価へ

制作途中の作品を写真に撮り、振り返りポスターとして色画用紙にまとめ、変化した内容やその意図などを記入していった。(図2参照)全員が完成した時点で、相互鑑賞の時間を設け、完成作品と振り返りポスターの両方を同時に鑑賞し、意見交流をした。作者(説明者)・鑑賞者・コーディネーターがそれぞれの役割を持って鑑賞することとし、新たな発見や、感想をワークシートにメモし鑑賞の視点を広げるようにした。(図3参照)



図2 振り返りポスター 図3 相互鑑賞の様子

(3) 成果と課題

生徒は、主題をよりよく表現したいという欲求から資料や写真を積極的に活用していた。また、振り返りポスターを作ったことにより、自分の作品については「今まで頑張ってきた過程が思い出せた」「どこをどんな考えで変えていったのかよくわかった」「自分の工夫点・苦勞したところ、自信のあるところをみんなに見てもらえた」、また友達の作品に対しては、「どうやったらうまく描けるのかがわかった」「文字と写真があり疑問に思ったことがすぐに分かった」「失敗点や成果・変化が分かっておもしろい」などの感想を持った。美術アンケート(12月実施)「自分の作品のよさや工夫点を言える」の肯定的回答は、7月から7.5%増加した。

今後は、制作と並行して振り返りポスターを作成することにより、お互いの気づきを次の制作へいかせるようにし、意欲を持ってより完成度の高い作品作りに取り組ませる工夫が必要である。

4. 成果と課題

(1) アンケートから

各領域についてのアンケートを行ったが、ここではメタ認知にかかわる項目(1自分の作品のよさに気づくか2自他の比較で自分のよさに気づくか3自他の比較で自分の足りないところに気づくか4自分のよさや

工夫点を言えるか5次はがんばりたいと思うか6もっとよくしていきたいと思うか)だけを取り上げて考察する。1~4の項目は自己知識にかかわるものであり、5・6は自己調整にかかわるものととらえている。

1年生では自己知識にかかわる部分は7月に比べて若干ではあるが向上している。それに対して、自己調整についてはあまり変化が見られない。やはり、低学年の発達段階では自己に対する知識を持つことは可能であるが、それにもとづいて自己を調整していくことは難しいようである。また、自己知識のなかでも肯定的な面、良さや工夫点などについては高めやすいが、否定的な面、足りないところや直したらよいところについては気づきにくいということが分かった。

5年生については7月と12月での顕著な変化は見られないが、総じて肯定的な評価(よくできる・できる)が高い。自己調整にかかわる項目についても肯定的にとらえている児童が多いことが分かった。1年生と比較してみると、自分にとって否定的な面についてもしっかりと認識することができるようになっていることが分かった。

表2 各学年のメタ認知に関するアンケートの結果(実数)

1年生		よくできる	できる	まあまあ	あまり
自分の作品のよさに気づくか	7月	15	12	3	2
	12月	21	9	1	1
自他の比較で自分のよさに気づくか	7月	12	15	3	2
	12月	20	9	2	1
自他の比較で自分の足りないところに気づくか	7月	10	8	8	6
	12月	11	9	8	4
自分のよさや工夫点を言えるか	7月	18	12	1	1
	12月	24	8	0	0
次はがんばりたいと思うか	7月	12	9	7	4
	12月	10	14	5	3
もっとよくしていきたいと思うか	7月	15	9	7	1
	12月	12	9	8	3

5年生		よくできる	できる	まあまあ	あまり
自分の作品のよさに気づくか	7月	22	8	7	3
	12月	19	14	6	1
自他の比較で自分のよさに気づくか	7月	19	14	4	3
	12月	15	18	4	3
自他の比較で自分の足りないところに気づくか	7月	29	9	0	2
	12月	26	10	3	1
自分のよさや工夫点を言えるか	7月	18	12	7	3
	12月	24	8	6	2
次はがんばりたいと思うか	7月	21	9	8	2
	12月	23	13	4	0
もっとよくしていきたいと思うか	7月	27	9	1	3
	12月	28	9	3	0

7年生		よくできる	できる	まあまあ	あまり
自分の作品のよさに気づくか	7月	3	12	15	10
	12月	5	9	20	6
自他の比較で自分のよさに気づくか	7月	0	18	14	8
	12月	4	12	18	6
自他の比較で自分の足りないところに気づくか	7月	20	16	2	2
	12月	22	12	6	0
自分のよさや工夫点を言えるか	7月	5	18	14	3
	12月	9	17	11	3
次はがんばりたいと思うか	7月	14	22	2	2
	12月	20	13	6	1
もっとよくしていきたいと思うか	7月	25	12	3	0
	12月	25	12	3	0

7年生では自己知識における肯定的な面の評価が顕著に低下していることがわかる。逆に否定的な面の評価はとても高いことがわかる。これは、自己に対する厳しい見方ができていると受け取れる。反面、自己の美術的な技術や発想などに他者と比較して劣等感を持ち始めているとも受け取れる。

自己調整は評価が高くなっており、やはり、発達段階が上がるにつれて自己知識を生かして自己調整していくことができるようになることが分かる。

メタ認知の能力については、短期的な取り組みでは、顕著な向上を図ることは難しいと考えているので、これからも引き続きメタ認知領域に焦点を当てて研究していくこととする。

(2) タキシノミーテーブル

今年度は発達段階に応じてメタ認知領域に焦点を当ててタキシノミーテーブルを作成していった。とらえてほしいことを具体的に児童・生徒の言葉で書くことによって指導者側の指導の視点を明確にすることができた。また、作成したタキシノミーテーブルに従って児童・生徒を見取っていくことができ、個々が認知プロセスのどの次元まで達成できているのかが図りやすくなったと感じている。取り組みの中で指導者側の予想を超えた反応も見られた。これらを蓄積しながら発達段階にあったメタ認知能力を明らかにし、それを身に着けるための手立てを仕組んでいきたい。

5. おわりに

今年度の研究で、メタ認知能力についての発達段階における傾向を明らかにしていくことができたと考える。来年度からは、その傾向を参考にしながら、発達段階にあった目標を明確に設定し、それに対する手立てを打った実践を行っていきたい。いずれにしても、短期間で育成することは難しいものであり、長期間を要するものである。幸い、本学園は9年間を見通した

一貫教育の実績と蓄積がある。これを今後も生かしながら取り組みを進めていきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 図画工作科編』 日本文教出版株式会社；文部科学省 (2008) 「中学校学習指導要領解説 図画工作科編」 日本文教出版株式会社。
- 2) 若元澄男 (2000) 「図画工作・美術科重要用語300の基礎知識」 明治図書出版。
- 3) 吉川和生, 中島敦夫, 大和浩子, 内田雅三, 中村和世 (2011) 「美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発—創造的思考力の育成とかわかって—」 『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』 第39号, pp. 255-260.
- 4) 新村出 (2008) 『広辞苑第六版』 岩波書店。
- 5) 竹内俊雄 (1961) 『美学事典』 弘文堂。
- 6) 同上書。
- 7) 中村和世・大和浩子・中島敦夫・吉川和夫 (2010) 「図画工作・美術科における『ブルームのタキシノミー改訂版』の活用に関する考察」 『学校教育実践学研究』 第17巻, pp. 71-80.

参考文献

- 1) 梶田叡一著 (2002) 『教育評価[第2版補訂版]』 有斐閣双書, pp36-39.
- 2) enjamin S. Bloom著 梶田叡一訳 (1974) 『学習評価ハンドブック』 第一法規出版。
- 3) 福家省造 (2011) 「造形表現活動の発達の過程とつきたい力 (模式図)」 『子どもと美術』 No. 68. pp. 20-21.
- 4) Winner, E. & Simmons, S. (Eds) (1992) *Arts PROPEL: Handbook for Visual Arts*. Educational Testing Service and the President and Fellows of Harvard College.